

力であり奴隷だったティーンエイジャーは、このとき兵士の予備軍となった。そして第一次世界大戦が始まると、彼らは軍隊に動員され、大戦後の世界大恐慌で失業者に変わり、その後は戦時下を支える集団になる。1930年代、アメリカで発足した「市民保全部隊」は、もともと失業者対策のプログラムだった。だが第二次世界大戦の勃発にもない、その役割を軍隊に移行していく。同じ頃、心身の鍛錬を目的にドイツで作られた「ヒトラー青少年団(ヒトラー・ユーゲント)」は、時局が戦争へ傾くにしたがい義務化され、結局は戦場へ駆りだされた。ティーンエイジャーの存在は、戦争によって、このように可視化されたのだ。

一方、「ティーンエイジャーは戦争の発明品だ」と喝破するとき、そこで大事な役割を担うのはアメリカの兵士たちだ。最初の大戦のあと、戦勝国も敗戦国も等しく傷ついた欧州に、本土が戦火にさらされなかったアメリカの兵士たちは新たな風を運びこんだ。アメリカ文化だ。フアッション、映画、チョコレート、コカ・コーラ……中でもこの作品で象徴的に扱われるのは、当時もつとも新しくなったダンス音楽、ジャズだ。アメリカに訪れた狂騒の1920年代、「フラッパー」と呼ばれる少女たちは、大人には理解することのできない、自分たちだけの快楽を次々に発見していった。そのひとつにスウィング・ジャズがあった。スウィングはそれまでのジャズと異なる刺激的なビートで彼女たちを揺らし、大陸に散らばったアメリカ兵を通じて、欧州のティーンエイジャーたちを魅了した。ジッターバグ、日本で言うジルバはスウィングに合わせて躍動するスウィング・ダンスの一種だが、同時期にアメリカから各国へ広がり、世の中のムードを大きく変えた。

その刹那を生きる当事者にとっては、文化的に有意義な時間だ。しかし視点を変えると、大人たちにとっては商品を売り込む経済的なターゲットである。

もちろんこのドキュメンタリーはその残酷さから目を背けていない。本作のなかで子どもたちは労働者から失業者、兵士、そして消費者へと、大人たちの勝手な思惑によって形を変えられていく。第一次大戦でPTSDを患った彼らの痛々しい姿が実感させるのは、大きなものに翻弄され、ちっぽけな自分を置き去りにするしかなかったティーンエイジャーの虚無だ。でもこの作品は、あくまで彼らの側に立って、「自分は自分」と高らかに叫ぶティーンエイジャーの希望を強調する。当時のアーカイヴ映像を掘り起こし、巧みにつなぎ合わせながら、監督のマット・ウルフはそこに匿名の誰かではなく、名前と表情と声を持つ確かな個人の痕跡を残そうとした。イギリスのブレンドン・デイーン・ポール、ドイツのメリタ、トミー、アメリカのウォーレンを映すパートは再現映像として撮影され、ジェナ・マローン(『インヒアレント・ヴァイス』)、ベン・ウイショ(『007 スカイフォール』)、ジュリア・ファンマー(『カルロス』)、ジェシー・アッシュャー(『インデペンデンス・デイ:リサージェンス』)が少女少女たちのモノローグを吹き込んだのは、彼らの生に寄り添おうとした監督の熱情ゆえだろう。だから厳密に言うと、本作はドキュメンタリーとフェイクドキュメンタリーの狭間にある。ディアハンターのブラッドフォード・コックスが作り上げたサウンドトラックは、不安、不満、期待、憧憬などがいつだって混ざりあうティーンエイジャーの心情を、夢見心地の音響に封じこめた。いまその真っ只中を生きる者にも、かつてそこに属していた者にも、『ティーンエイジ』はありありと伝える。きらきらとまばゆく、もやもやとくすぶるティーンエイジャーの息づかいを。

ナチスに抵抗した若者たちとして本作で紹介される、ハンブルクの「スウィングボーイズ(スウィング・ユウゲント)」も、その影響下にあった少女少女たちだ。戦争によって拡散したアメリカ文化は、ティーンエイジャーの憧れを形成し、その後ティーンエイジャーを特徴づけるスタイルになった。

原作はイギリスのジャーナリスト、ジョン・サヴェージによる『Teenage: The Creation of Youth Culture』。サブタイトルが示す通り、このドキュメンタリーはティーンエイジャーが担ったユース・カルチャーの生成過程をとらえた作品でもある。フラッパーに始まり、ズートスーツの若者たちや社交界デビューする少女(debutante)たちの予備軍「Sub-Debs」らの隆盛を経て、1945年『ニューヨーク・タイムズ』に掲載された「ティーンエイジの権利宣言」でユース・カルチャーの基盤は整えられた。原作者のサヴェージは、実はその後のユース・カルチャーの変遷を「イギリス「族」物語」(原題は『The History of English Youth Culture』)という著作にまとめている。これはデディ・ボーイ、ロッカーズ、モッズ、スキンヘッズ、パンクスなど、1950年代以降に登場したさまざまなユース・カルチャーを分類・解説した一冊だが、興味深いのはサヴェージがここでティーンエイジャーを明確に「10代の消費者」と呼んでいることだ。ティーンエイジという概念が成立したきっかけには、本ドキュメンタリーでは触れていない、アメリカのユージン・ギルバートという人物が行った若者の市場調査があった。彼は15歳から19歳までの少女少女が市場にとって重要な年代であることを調査し、その結果をメーカーやプランナーの前に突きつけたという。ティーンエイジは、



★1

「インヒアレント・ヴァイス」
監督:脚本:ポール・トーマス・アンダーソン
撮影:ロバート・エルスウィット
キャスト:ジョニー・グリンウッド、キヤスト・ホアキン・フェニックス、ジョシユ・ブローリン、オーウェン・ウィルソン
2014/148分/アメリカ

★2

「007 スカイフォール」
監督:サム・メンデス
脚本:ジョーン・ローガン、ニール・パーヴィス、ロバート・ウェイド
撮影:ロジャー・ディーンマン
音楽:トーマス・ニューマン
キャスト:ダニエル・クレイグ、ハビエル・バルデム、レイフ・ファインズ
2012/143分/イギリス、アメリカ

★3

「カルロス」
監督:オリヴィエ・アサイヤス
脚本:オリヴィエ・アサイヤス、ダン・フランク
撮影:ヨリック・ル・ソー、ドニ・ルノワール
キャスト:エドガー・ラミレス、ファディ・アビ・サムラー、マッド・カー、パウル・ド・ノワール、フランシス・レイ
2010/334分/フランス、ドイツ

★4

「インデペンデンス・デイ:リサージェンス」
監督:ローランド・エメリッヒ
脚本:ニコラス・ライト、ジェームズ・A・ウッズ、デイヴィッド・ゲリン、ローランド・エメリッヒ、ジェームズ・ヴァンダービルト
撮影:マルクス・フォードラー
音楽:ハラルド・クローサー、トーマス・ワンカー
キャスト:アム・ヘムズワース、ジェフ・ゴールドブラム、ビル・ブルマン
2016/120分/イギリス、アメリカ

門間雄介(もんま・ゆうすけ)

編集者/ライター。
BRUTUS、CREA、DIME、ELLE、Harper's BAZAARなどの雑誌、Webで映画を中心に執筆・編集。「星野源の音楽の話をしよう」(AERA)、「cero高城晶平のSmall Town Talk」(POPEYE)の構成を担当する。

美術

特別講義

英語

地理

建築

休み時間

音楽

家庭科
(調理)

家庭科
(服飾)

サボリ①

出席名簿

サボリ②

国語
(書評)

国語
(批評)